

本サービスにおける著作権および一切の権利はアイティメディア株式会社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスの出力結果を無断で複写・複製・転載・転用・頒布等を行うことは、法律で認められた場合を除き禁じます。

「英語に愛されないエンジニア」のための新行動論(13):

トラブル遭遇時の初動方針は、「とにかく逃げる!」

<http://eetimes.jp/ee/articles/1301/22/news003.html>

どれだけ周到に準備をしたとしても完全には回避できない——。悲しいかな、トラブルとはそういうものです。悪天候でフライトがキャンセルされたり、怖い兄ちゃんが地下鉄に乗り込んできたり、“昼の”歓楽街でネーチャンにまとわりつかれたり……こういうものは、はっきり言って不可抗力です。実践編(海外出張準備編)の後編となる今回は、万が一トラブルに遭遇した場合の初動方針についてお話しします。

2013年01月22日 07時00分 更新

[江端智一, EE Times Japan]

われわれエンジニアは、エンジニアである以上、どのような形であれ、いずれ国外に追い出される……。いかに立ち向かうか?→「[『英語に愛されないエンジニア』のための新行動論](#)」連載一覧

22歳の時、私はインドの旅の途中、ニューデリーの安宿(ドミトリー)で倒れました。

原因は、私にあります。私は、ドミトリーに誰かが忘れていった(と思っていた)、ペットボトルのミネラルウォーターを、「ラッキー!」とばかりに一気に飲みましたのです。キャップの状態も、ろくに確認もしないままに。

今となっては確信しているのですが、あのペットボトルに入っていた水は「生水」であったと思います。当時のインドにおいて、生水とは「歯を磨いた後、口をすすぐだけでも下痢をする」と言われているくらい危険な飲料だったのです。その生水を一気に飲みするということが、何を意味するのかは明らかです。私はその後、3日間にわたって、文字通り死線をさまようこととなります。

消化器系の臓器が全て溶け落ちて、肛門から排出されているのではないかというくらいのも、すさまじい下痢。それはもう、肛門から、小便ばかりか体液まで絞り出されているかのような、想像を絶する激痛と脱水状態。同室の外国人に、大量の水を購入してもらったのですが、10分おきにトイレとベッドを往復する以外には何もできず、やがて、それすらも不可能な状態となりました。



写真はイメージです

高熱でもうろうとする中、私は生まれて初めて「死」を覚悟しました。

さて、そんな死線をさまよっていた私を、同じドミトリーに宿泊していた日本人のバックパッカーたちは置き去りにしました。私が赤痢かコレラに感染しているといううわさが、その安宿の中で立っていたためのようです(後で聞きました)。

しかし、私は、その時も、そして今でも、彼らのことを一片たりとも恨んではいません。

彼らが正しいのです。

伝染病にかかった人間(その可能性がある場合も含む)に関わって、感染するのは愚の骨頂です。この場合は、「見捨てる」が絶対的に正しい選択です。私でも同じことをすると断言できます。

ではなぜ、私が現在、この原稿を執筆できているかというと、同じフロアにいた外国人女性が助けてくれたからです。彼女は手ずから、食塩を振った白米のご飯をスプーンで食べさせてくれ、そして4日目の朝、私が立ち上がれるようになった時には、もうドミトリーから旅立った後でした。「感動」という言葉だけでは違和感を覚えます。あえてそれを表現するとすれば、「何か不思議なものが私に触れて、そして去っていった」というフレーズが、一番しっくりきます。

まあ、それはさておき。

繰り返しますが、私は、私を見捨てた人たちを、まったく恨んでいません。

私たち英語に愛されないエンジニアは、異国の地において、「仲間を見捨てる者となること」を恐れてはならず、「仲間から見捨てられる者となること」を覚悟しておかなければなりません。

私たち自身が、生きて日本に帰るために。

逃げて、逃げて、逃げまくる

さて、[前編](#)では、「海外出張の準備＝トラブル回避の実行手段」であることをお話しました。入念な準備がどれだけ大切かということは、分かっていただけだと思います。それでもなお、完璧なトラブル回避は不可能です。

そこで今回は、「トラブルに遭った場合の初動方針は、『逃げて、逃げて、逃げまくる』」についてお話ししたいと思います。

大前提として、言うまでもなく、「逃げなければならない状況に近付かないこと」が大切です。「危険」と記載されているところはもちろんですが、記載されていない場所であっても、危険を「感知できる」ようになりましょう。

例えば、

■地下鉄で危なそうな兄ちゃんが複数で入ってくるのを察知した瞬間、別の車両に移動する

これは兄ちゃんたちが乗る車両を決めてしまってからでは遅いのです。その後動いては、インネンを付けられる可能性があり、囲まれたら動けなくなるからです。また、入ってくるのを察知した瞬間に別の車両に移動するような者は狙われにくいです。「あいつ、結構な場数を踏んでいやがるな」と思ってもらえることもあります。

■爆発音や銃声が聞こえたら、振り向かずに、逆方向に走り出す

誠に残念なことですが、日本人の「危険予知感度」は低いと思います。例えば、人の悲鳴が聞こえたとき、そちらに興味を持って振り向いたら「負け」です。そちらを振り向く時間で、3mは逃げられます。10m離れば、拳銃の弾ならまず当たりません。



また、悲鳴の主が、上司であれば言うまでもなく、同僚や部下

の声であっても引き返してはなりません。当然のごとく見捨てましょう。私はこれまでの旅行で、「煙の上がっている方向」や、「人が集まっている場所」とは真逆の方向に進むことで、生き残ってきました。海外において「下手な好奇心」は命に関わることもある、と覚えておいてください。

■もし囲まれたら、あらんかぎりの大声の「日本語」で叫ぶ

現地の言葉で、「助けて」と叫んではダメです。逆に助けてくれないからです。誰だって巻き添えを食うのはイヤなはずです。この場合は、意味の通じない異国の言葉が効果的です。

私のケースですが、ある外国の歓楽街を“真昼に”歩いていたとき、いわゆる「ぼん引きのネーチャン」にまとわりつかれ、「やかましい! どけい!!」と、歓楽街に響き渡るような大声の日本語で怒鳴りつけました。周囲の注目は全て私に向かい、オネーチャンは驚いたように「ウララー」(本当にこう言った)と言って、道を空けました。

あくまで、これらはフィジカルハザードの事例です。

海外の仕事から、「逃げて、逃げて、逃げまくる」というのも、ありですけど、それができるくらいなら、そもそも海外なんぞに飛ばされているわけがありませんね。

身の安全を確保→日本語ができる人を探す

それでは、次に「トラブルシューティングは、自分の身柄の安全を確保してから開始する」についてお話しします。

基本的にトラブルが発生した場合、心理的に相当動揺している状態にあります。この状態のままトラブルシューティングを開始すると、たいていの場合、さらにひどい目に遭います。

そのトラブルが発生している場所は、日本ではないのです。言葉は全く通じませんし、相手の言っていることも全く理解できません。そんな状況下でトラブルに遭遇し、落ち着いて対処できるヤツがいたら、そいつは人間ではありません。

そのとき、あなたの頭脳のパフォーマンスは100%近くになっており、他の機能が著しく低下しています。それは、あたかもWindowsのタスクマネージャーのパフォーマンスタグのCPU使用率が100%からピクリとも動かず、他のアプリケーションをたたいても、全くアクティブにならない状態と同じです。

具体的な事例を1つ。

インドでタクシーの運転手と言い合いになったことがあります。そのとき、タクシーの運転手が「もう、この時間(深夜だった)にバスはない」と言うので、「本当か」と現地の人に尋ねたところ、タクシーの運転手がうそをついていることが判明しました。「ふん! ザマーミロ!!」と吐き捨てるよう言って意気揚々とバスに乗った後、次に行くホテルを記載した書類をバス停に置き忘れたことに気がつきました。

この程度の軽いトラブルであっても、簡単に別のトラブルを引き起こしてしまうものなのです。

そこで、私からのアドバイスです。

まずトラブルに遭ったら、荷物は全てバックやリュックに入れて、両手をフリーにできる状態にします。手に握っているモノは、必ず紛失すると思ひましょう。もし両手をフリーにできない荷物があるなら、手首と荷物をひもで結ぶなどして対処してください(本当)。

私の場合、フックを付けたストラップを財布と携帯電話に付けて、常にベルト通しのところに引っかけています。ただし、携帯電話を入れるベルトホルダーごと引っかけていると、警察官が携行している小型拳銃のようにも見えますので、注意が必要です。先日、予想通り、中国のセキュリティチェックでつかまりました。こんなことで射殺されたら、世界中の笑い者です。

まあ、それはさておき、「トラブルに遭ったら、落ち着け」とはよく言われますが、「落ち着けるようなトラブル」なら、それはトラブルではありません。

二次的トラブルを回避するためには、まず、両手がフリーになった状態を確保してください(先ほど言ったように、手荷物を飛散しないように体の周りに集めるなど)。そして、その場に立ち止まって、3ステップ程度先までトラブル対応手段を考えます(全ステップを考える必要はありません)。

そして、次に大切なのは、日本語で対応してくれる人を見つけ出すことです。例えば、日本に連絡する、JALかANAのカウンターに行く、保険会社に電話する、大使館に連絡するなどです。ここで重要なのは、日本語で相談できる相手を複数以上書いたメモを、全部の手荷物の奥に突っ込んでおき、さらに自分のポケットにも1枚突っ込んでおくことです。



まず日本語で誰かとしゃべりましょう。

対応すべきことが自分で整理できますし、うまくいけば、よいアドバイスをもらえることもあります。直接、解決に乗り出してくれる人もいるかもしれませんが（でも、いないとおいておいた方がいいです）。

「トラブル対応能力を上げたい」なんて一言も言ってない！

さて、最後になりますが、「トラブルに遭ったって、なんとかなるさ」と言い放つ人が、日本人の中にも結構な数います。特に海外出張を繰り返しているベテランや、海外赴任経験者によくみられます。はっきりと申し上げたいと思いますが、不本意な海外出張をしなければならない私たちに、あなたたちのくだらない「経験主義」を押し付けるのをやめてほしいのです。

そりゃ、どんなトラブルであれ、なんとかなるでしょう（最悪でも命を失うだけで、戦争に発展することなどはないでしょう）。

問題は「なんとかなる」ではなく、トラブルに遭うこと自体が、大変な「苦痛」であるという事実なのです。できれば、苦痛なく海外出張を終えたいと思うのは当然です。トラブルを重ねることでトラブル対応能力が上がるのは事実でしょう。しかし、われわれは、そんなトラブル対応能力を上げることを目的として海外に出張するわけではないのです。

「『海外で仕事をしたい』なんて一言も言っていない！」私たちは、「『トラブル対応能力を上げたい』なんて一言も言っていない！」のです。

私たちは「海外出張で、トラブルに遭いたくない」。

それだけなのです。

□

では、次回からは、本編の続き、出国・入国、ホテルチェックイン編に入ります。皆さん、ごきげんよう。

付録: 海外出張の苦い記憶～江端、(何度目かの)死線をさまよう～

ノルウェーで開催された、「Internet Engineering Task Force (IETF)」ミーティングから帰国するフライトでの出来事です。

満員の飛行機の中、隣はANAパックの新婚さん、私の真後ろの席は足で背もたれを蹴りまくるガキ、とゆっくり眠れるような環境にないことを悟った私は、一刻も早く眠気がやってくるように、ハルシオン(睡眠薬)を一錠口に放り込むと、ショルダーバッグから英語のドラフトを取り出して読み始めました。しかし、ドラフトの内容はまったく頭に入りませんし、眠気も一向にやってきません。仕方がないので、今度はショルダーバッグからウイスキーの小瓶を取り出すと、ミネラルウォーターで割って、ちびちびと飲み始めました。

国内で評判の高かった映画が機内で上映されることを知り、何の気なしに見ていたのですが、その内容のあほらしさ、陳腐さ、矮小(わいしょう)さに目まいがして、旅の疲れも相まって、どんどん気分が悪くなってきました。

最後まで見ればきっと面白くなるんだと信じて見続けていましたが、映画が終わった時点で、真剣に吐き気がしてくるほど気分が悪くなりました。あまりの気分の悪さに眠れなくなった私は、ハルシオンをもう一錠、ウイスキーの水割りで流し込みます。使用上の注意には、「絶対にアルコールと併用しないこと」と記載されていましたが、これまで、時々そのような使い方をしても問題が起きなかったもので、私は特に気にしてはいませんでした。

そして、その時点から私の記憶はありません。今になって思えば、あれは「眠った」のではなく「気を失った」が、正しい状態だったのだと思います。



写真はイメージです

昏睡(こんすい)状態に陥った私は、飛行機が着陸態勢に入ったときはもちろん、着陸時の衝撃にも全く意識を回復しませんでした。隣の席の新婚さんに揺り動かされて、ようやく立ち上がった私は、その場で転倒しそうになりました。

何とか機外に出て、バゲージクレームで自分の荷物をようやく見つけ、荷物を抱えて近くのベンチに座ったところで、完全に私は事切れます。

「……お客さん、お客さん!」と声をかけられて目を覚ましてみると、そこは成田空港第二ターミナルの、ベルトコンベアが数台並んだバゲージクレームエリア。奥行き200mはあろうかとい

うその広大な空間には、人っ子一人いませんでした。恐る恐る声の方を見上げると、制服を着た入出国管理局の職員のお兄さん。

「どうかした？」と愛想のかけらもない声が広いロビーに響き、かすかにエコーしていました。私は自分が失神していたことに気がつき、お兄さんにわびを言って、出国手続きのゲートを抜けようとしたのですが、そこで徹底的に荷物のチェックを受けることになってしまいました。

「なんでも好きなだけ調べてくれ!」と、ぼんやりとした頭で自分の荷物を見ているうちに、ゲートを追い出されて、私は右に左にふらふらしながら、待合エリアのベンチにたどり着きました。ベンチに座っていると、突然吐き気がこみ上げてきて、私は口を押さえながら何とかごみ箱の前にたどり着くと、激しく嘔吐(おうと)してしまいました。真っ昼間の午後3時のことです。

その後、成田空港第二ターミナル駅のホームで、さらに2時間近く気を失い続け(合計4時間、失神していた)、やっと乗った成田エクスプレスの中でも気分の悪さに目まいを感じつつ、なんとか横浜駅で下車、スーツケースの車輪がもげている事にその時初めて気がつき、スーツケースをずるずる引きずりつつ、ふらふらしながら乗り換えの電車を探したのでした。

よくテレビなどで、麻薬を服用して検挙された後、服役して更正した人物が、「絶対に麻薬に手を出してはいけない」などと言っている場面を見ます(NHKに多い)。

もちろん、そういうセリフには迫力も説得力もあり、その人の言葉は世の中の役に立っているように見えますが、「麻薬に手を出してはいけない」などという、子供でも分かることをやり、しこたまひどい目に遭って、それで「本当にひどい目に遭うよ」と熱く語る姿は(繰り返しますが、私は有用だと思ってはいるのです)、要するに想像力が欠如していて、先人の反省を全く生かせなかった愚か者のように私には思えます。

「睡眠薬とアルコールを併用してはいけない」ということは、睡眠薬の使用上の注意に必ず書いてあるし、それ以前に「常識的にやってはいけないこと」と断言してもよいでしょう。

要するに、私という人間は、人の言うことから学習せず、自分の行った失敗のみから学習する典型的な「想像力欠如人間」と決め付けてよさそうです。

□

あまりこの言葉は乱用すべきではないとは思いますが、こういう人間を、一般的に「馬鹿者」と呼びます。

本連載は、毎月1回公開予定です。[アイティメディアID](#)の登録会員の皆さまは、下記のリンクから、公開時にメールでお知らせする「連載アラート」に登録できます。



Profile

江端智一(えばたともち) [@Tomoichi_Ebata](#)

日本の大手総合電機メーカーの主任研究員。1991年に入社。「サンマとサバ」を2種類のセンサーだけで判別するという電子レンジの食品自動判別アルゴリズムの発明を皮切りに、エンジン制御からネットワーク監視、無線ネットワーク、屋内GPS、鉄道システムまで幅広い分野の研究開発に携わる。

意外な視点から繰り出される特許発明には定評が高く、特許権に関して強いこだわりを持つ。特に熾烈(しれつ)を極めた海外特許庁との戦いにおいて、審査官を交代させるまで戦い抜いて特許査定を奪取した話は、今なお伝説として「本人」が語り継いでいる。共同研究のために赴任した米国での2年間の生活では、会話の1割の単語だけを拾って残りの9割を推測し、相手の言っている内容を理解しないで会話を強行するという希少な能力を獲得し、凱旋帰国。

私生活においては、辛辣(しんらつ)な切り口で語られるエッセイをWebサイト「[江端さんのホームページ](#)」で発表し続け、カルト的なファンから圧倒的な支持を得ている。また週末には、LANを敷設するために自宅の庭に穴を掘り、侵入検知センサーを設置し、24時間体制のホームセキュリティシステムを構築することを趣味としている。このシステムは現在も拡張を続けており、その完成形態は「本人」も知らない。

本連載の内容は、個人の意見および見解であり、所属する組織を代表したものではありません。

関連リンク

[筆者の個人Webサイト「江端さんのホームページ」](#)

Copyright© 2016 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

